

## 朝日地球会議 2021

新型コロナウイルスの流行に収束の兆しが見えない中、国際シンポジウム「朝日地球会議2021」は2年連続のオンライン開催となりました。「希望と行動が世界を変える」をメインテーマに、国内外の識者や企業・NPO関係者らを招き、10月17～21日の5日間、計34セッションを発信しました。視聴者数はのべ約105万人に達し、前年(約56万人)を上回ることができました。

朝日地球会議は前身の朝日地球環境フォーラムから2016年に衣替えして6回目。国内外のシンポジウムや国際会議が一斉にオンライン化するなかで、質の高さや注目度、集客などで実績ある朝日地球会議の存在感を維持拡大したい――。事務局は、そうした思いから、より多くの視聴者獲得をめざし、数々の工夫を重ねながら準備しました。

たとえば、地球会議を朝日新聞社のフラッグシップイベントと位置づけるのにふさわしいように、「見応え」に徹底的にこだわりました。登壇者は、質が高く、華やかさを感じられるような顔ぶれを目指して交渉を重ねました。配信では、テレビ番組のようにセッション間の切れ目をなくし、なめらかさを追求。そうした工夫の結果、のべ約105万人という視聴者数をはじめ、事前登録者数や協賛関連の売り上げも、前年の実績を更新することができました。

5日間の配信では、気候変動や環境、SDGs(国連の持続可能な開発目標)を取り上げた数々のセッションを設定しました。地球会議の前身が環境問題を中心に議論した「朝日地球環境フォーラム」だったこともありますが、それだけではありません。新型コロナという世界的パンデミックの影響で、世代を問わず自然や環境への関心がとても高まっていると感じたからです。

東京大学でSDGsに向けた取り組みを担う「未来ビジョン研究センター」は、前回に続き特別共催者となりました。同研究センター長の城山英明さんは、特別共催者のあいさつで、「政府や地方自治体、NPO、企業が解決のために対話を重ねる場」として、朝日地球会議に期待すると述べました。

気候変動と生物多様性をテーマにした二つのセッションでは、同研究センター教授の高村ゆかりさんがコーディネーターとなりました。研究者の報告だけでなく、国内外のビジネスパーソンも参加。「金融資本を持続可能で自然にやさしい解決策に向かわせなければならない」として、企業による生物多様性に関連した財務情報の開示や、影響評価の指標づくり、企業・団体などの横断的な取り組みの重要性を強調しました。

2022年秋に十三代目市川團十郎を襲名する歌舞伎俳優の市川海老蔵さんも登壇しました。長野県・志賀高原で植樹活動を続け、「地球環境のために何かしたい」と少し前にNPO法人を立ち上げていました。「子どもたちに残したい 私たちの家『地球』」と題したパネル討論では、海老蔵さんとともに、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)報告書の統括執筆責任者だった東京大総長特別参与の沖大幹さんと、各地の沿岸部などを訪ね歩いて環境問題を「現場」から研究する上智大大学院教授のあん・まくどなるどさんが登壇し、地球環境を守るためにどんな社会を目指すべきかについて考えました。



市川海老蔵さん(左から2人目)が登壇したセッション。  
東京本社新館に仮設スタジオをつくり収録した

環境への配慮では、地球会議の運営面でも「何かできないか」と知恵を絞りました。会議の終了後に廃棄されがちな仮設スタジオの舞台セットは、なるべく廃棄物が少なくなるように制作会社に要望し、簡素化に努めました。会議終了後はセットの一部を保管し、約半年後に開催した単発の会議体「朝日地球会議plus」で再利用しました。

会議に不可欠な運営マニュアルは、山積みにして自由に取っていく方式をやめ、事前に電子ファイルで共有して各自が必要分だけを印刷する方式に変更し、紙の節減につなげました。登壇者らに用意する弁当も、事前に必要の有無を細かく確認して無駄が出ないようにしました。

ところで、朝日地球会議2021での登壇者の女性比率をみると、登壇した96人のうち、女性はちょうど半数の50%となり、20年の41.7%を上回りました。朝日新聞社が20年春に公表した「ジェンダー平等宣言」では、朝日地球会議の登壇者の男女比がどちらも4割を下回らないことを掲げており、2年連続で達成できました。視聴の事前登録者も、10～50代で女性が男性を大きく上回っており、年を追うごとに女性の割合が拡大しています。

朝日地球会議2021の終了後、22年3月には単発で「朝日地球会議plus 世界はどう動く? COP26グラスゴー気候合意を読む」をオンライン配信しました。国連の気候変動枠組み条約締約国会議(COP)の報告だけでなく、直前に起きたロシアによるウクライナ侵攻が気候変動問題にどう影響するかという視点でも議論されました。

朝日地球会議の事務局では、毎年秋に開催する地球会議本体とは別に、こうした「地球会議plus」を年間通じて定期的で開催していくことで、地球会議のファン層との交流を重ね、ファンコミュニティを育てていきたいと考えています。